

A Linguistic Approach to the Study of Language Acquisition

言語学的アプローチによる言語習得研究

William O'GRADY

ウィリアム・オグレディー

1. はじめに

本論では、言語習得研究 (the study of language acquisition) に対しての言語学的アプローチ (the linguistic approach) とはどのようなものであるかということに関して私の考えを述べたい。このような議題に対して、他にどのようなアプローチが可能なのかというような問がまず挙がるかもしれない。言語習得研究に対するどのアプローチでも必ず言語学的なのではないかと思われるかもしれない。しかしながら、私が意図する「言語(学)的」(linguistic) という用語の定義からすれば、ほんのひとにぎりの第一言語習得研究および第二言語習得研究しか「言語学的」とは言えないのである。

以下に述べるように言語習得研究に対する言語学的アプローチは現代言語学 (contemporary linguistics) の考え方に基づくものであり、その中でも最も重要なのは次に挙げる二点である。

- 1) 言語は人間の認知システムの活動を反映した現象であり、直接観察することはできないが、文法の分析と心理言語学的実験を通して実証的に研究することが可能である。私の考えでは最良の方法は文法分析と実験の両方を用いることである。すなわち、まず初めに、対象とする言語現象の文法分析を注意深く行い、習得の対象となる規則や原理を特定する。次に、言語習得の過程においてそれらの規則や原理がいつ学ばれるのか、また更には、どのようにして学ばれるのかをつきとめるような心理学的実験を行う。
- 2) ある特定の言語がどのような構造を持ち、それがどう習得されるのかを調べるためには、しばしばその対象となっている言語以外の言語の研究が必要となる。言語学における統語論や音韻論ではこれはごく当然のこととして捉えられている。たとえば、もし代名詞の解釈 (pronoun interpretation) とか口蓋化 (palatalization) の仕組みについて知りたければ研究の対象としている言語以外のデータも考慮することになる。しかしながら言語習得研究の分野においては、この交差言語的研究 (cross-linguistic work) の重要性はあまり認識されていないのが実情であり、この研究分野全体に対しても交差言語的研究の与える影響は決して大きくない。

本論では、なぜこのような考え方に基づくアプローチが好ましいのか、またこのような考え方が実際にはどのような形で研究に活かされるのかを紹介する。以下では、私自身が学生との共同研究などを通して最近行ってきた第一言語習得と第二言語習得の研究を中心に話を進める。

2. 英語の与格交替

英語の移動を表す動詞の多くは以下のいずれかの構文で使うことができる。

(1)a. 与格構文

Mark gave a book to Jane.

b. 二重目的語構文

Mark gave Jane a book.

このように同一言語において意味の似た二つの構文を使用する事が可能な場合、次のような疑問が当然挙げられる。すなわち、どちらのパターンが最初に習得されるのか、また学習者の誤りはどちらか一方のパターンにもう一方より多く現れるのかといった疑問である。もちろん、これらの問題を提起することは第一言語習得でも第二言語習得でも、またその両方においても可能である。

第一言語としての英語習得においてこのことを調査するために、私は以前、人形や道具を使って子供の文理解力を試す動作法 (**act-out task**) による実験を行った。この実験はさまざまな文を子供に与えて、その文の意味を動作によって示させることにより理解力を調査するというもので、使用したのは以下のような文である。

(2)a. 与格構文

The cow showed the dog to the horse.

b. 二重目的語構文

The cow showed the horse the dog.

これらの文は名詞句の位置を入れ替えても意味の通じない文にはならないという点で完全に可逆的 (**reversible**) な文だということができる。これは重要なことである。なぜならば、子供は英語の語順がどのような役割を担っているのかを知らなければ、この文の意味を正しく理解することができないからである。与格 (**to-dative**) 構文では(3)に示すように、動詞の後にくる最初の名詞句が主題 (**theme**) または受動者 (**undergoer**) で、**to** の後に来る名詞句が行為の着点 (**goal**) または受け手 (**recipient**) であることが理解できなければならない。

(3) 与格構文

The cow showed the dog to the horse.

動作主 主題 着点

一方、二重目的語 (double-object) の構文では(4)に示すように動詞の後にくる最初の名詞句が着点 (goal) で最後の名詞句が主題 (theme) であることが理解できなければならない。

(4) 二重目的語構文

The cow showed the horse the dog.

動作主 着点 主題

この実験は 6 歳児と 7 歳児 25 人を対象に行われた。その結果、与格構文（主題－着点の語順）は約 80%の正解率であったが、二重目的語構文（着点－主題の語順）はわずか 30.4%の正解率であった。さらに、最も多く見受けられた間違いは(5)に示すような二重目的語構文の意味を与格構文のように解釈するというものであった。

(5) 実際の文

子供の解釈

The lion showed the giraffe the bear. → The lion showed the giraffe to the bear.

動作主 着点 主題 動作主 主題 着点

これらの事実は与格構文の方が二重目的語構文よりも容易であるということを強く示しているようである。

私がこの研究に取り組んでいた頃、V. J. Cook という研究者もまたこの2つの構文に関しての調査を行っていた (Cook, 1976)。彼の実験も同じく動作法によるものであったが、被験者の数は 5 歳から 10 歳までの 90 人と私の実験よりはるかに多い人数の子供たちを対象としていた。結果は以下の通りである。

表 1 Cook の実験結果(120 文中の正解数)

文型	5 歳	6 歳	7 歳	8 歳	9 歳	10 歳
与格構文	106	111	117	120	119	120
二重目的語構文	37	34	32	48	74	63

表から明らかなように、この実験でもすべての年齢別グループで「主題－着点」の語順である与格構文の方が二重目的語構文よりはるかに成績が良かった。他の多くの研究でも同じような結果に至っており (Waryas & Stremel, 1974; Osgood & Zehler, 1981; Roeper et al., 1981), これはまたその後行われた第二言語習得の調査においても同様であった (例

えば White, 1987).¹

この理由を説明するために、いくつかの検討すべき可能性を挙げることができる。まず初めに考慮すべきことのひとつに、入力における2つの構文の相対頻度が挙げられる。これは必ずしも単純明快ではないが、概して与格構文の方が二重目的語構文よりその使用頻度が多い。その理由は、与格構文に使うことのできる動詞の数が二重目的語構文に使うことのできる動詞の数よりも多いという単純な理由が考えられる。² このような頻度の問題が決定的な要因であると仮定すれば、以下のような仮説を立てることが可能である。

(6) 入力の仮説：子供は入力の頻度が多いものを先に習得する。

これに対して次に述べる可能性は文のパターンそのものの性質として捉えることができる。与格構文では着点または受け手を表す名詞句の前には前置詞の *to* が使われる。これに対して、二重目的語構文では着点を指し示すような特別な形態素は使われない。子供は明確かつ顕在的に意味役割が示されたものを好むことから（例えば Slobin, 1985）、これが与格構文の方よりを好む要因になっているという可能性も考えられる。これを明示性の仮説として(7)に示す。

(7) 明示性の仮説：子供は意味役割が形態素によって明確に示された構文を好む。

また、他の可能性として有標性に関するものを挙げることができる。全世界の言語において、なんらかの理由により、二重目的語構文を使用できる言語は与格構文を使用できる言語よりも少ないことがわかっている。英語では二重目的語構文が可能であるが、たとえばフランス語や日本語などを含む他の多くの言語ではこのパターンは許されないのである。さらに、二重目的語構文が可能な英語のような言語でさえ、動詞の中には与格構文でしか使えないものが多くある。以下に示すように *donate*（寄贈する）や *suggest*（提案する）はその例であるが、これらとは逆に二重目的語構文でしか使えないような動詞はごくわずかにしか存在しない。

(8) Mary donated the money to the Red Cross.

*Mary donated the Red Cross the money.

¹ この結果は文産出においては異なることがわかっている (Pinker, 1989, pp. 284-85; Gropen et al., 1989, pp. 213-16; Snyder & Stromswold, 1997). この議論については O'Grady (1997, p. 209) を参照されたい。

² しかし、その一方で Snyder & Stromswold (1997) は両方の構文で使える動詞 (*show*, *give*, *tell* など) は、二重目的語構文の方により頻繁に使用されると報告している。

(9) Harry suggested a new idea to the teacher.

*Harry suggested the teacher a new idea.

このように世界の言語において、またある一言語内においてより共通性の低い特徴を有標 (marked) と呼び、より共通性の高い無標 (unmarked) と対比して捉える。二重目的語構文の有標性 (言語間と言語内の両方における有標性) にどのような要因があるにせよ、この事実が言語習得に影響を及ぼすことは十分に考えられる。これを以下のように有標性の仮説と呼ぶことにする。

(10) 有標性の仮説：子供は有標の文型より無標のものを容易く学ぶ。

第四の可能性は写像性 (iconicity) と呼ばれるものに関する仮説である (例 Talmy, 1988; Van Voorst, 1988, p. 27; Pinker, 1989, p. 193; Dik, 1989; Croft, 1991, p. 262; Langacker, 1995, pp. 18-20; Ritter & Rosen, 1998)。ここでは、写像性を文の語順とその文が表す出来事の起こる順番の一致として捉える。たとえば、移動動詞の give, show, tell などでは、その出来事は(11)に示すように、まず動作主 (agent) から始まり次にその行為を受ける主題 (theme) へ、そして最後に着点 (goal) への移動という順をたどる。

(11) 移動の出来事の構造

動作主 → 主題 → 着点

例えば(12a)の文では、その出来事は動作主である Mary が主題である本を手に取り着点である John に移動させるという順をたどり、この一連の移動の順番がそのまま文の語順に反映されている。よってこのような与格構文は写像的だが(12b)の二重目的語構文は写像的ではないといえる。

(12)a. 与格構文 (写像的)

Mark gave a book to Jane.

動作主 主題 着点

b. 二重目的語構文 (非写像的)

Mark gave Jane a book.

動作主 着点 主題

この写像性に基づいた仮説を一致の仮説として以下に示す。

- (13) 一致の仮説：子供は文の語順とその文が表す出来事の起こる順番が一致している
写像的な文を好む。

入力の仮説、明示性の仮説、有標性の仮説、そして一致の仮説の4つの仮説のうちどれが正しいのであろうか。英語に関してはこれら4つの仮説のすべてがデータを説明し得るのでその答えは出せない。そこで、我々がすべきことは、これらの仮説の検証において異なる結果が予測されるような言語を探すことである。次に示すように、韓国語の習得研究に調査の範囲をのばすことによってこれが可能となる。以下で紹介するのは、Cho et al. (1998, to appear) で行った韓国語習得の共同研究である。³

韓国語では(14)の例文が示すように語順に関係なく格助詞が文法関係を示すため、主題と着点の順番を自由に入れ変えることが可能である。

(14)a. 主題－着点の語順

動作主	主題	着点	
Ai-ka	tol-ul	kay-eykey	tenci-ess-ta.
child-Nom	stone-Ac	dog-Dat	throw-Pst-Decl
‘The child threw a stone to the dog.’			

b. 着点－主題の語順

動作主	着点	主題	
Ai-ka	kay-eykey	tol-ul	tenci-ess-ta.
child-Nom	dog-Dat	stone-Ac	throw-Pst-Decl
‘The child threw a stone to the dog.’			

もちろん韓国語の交替現象は英語の与格構文と二重目的語構文の交替とは幾つかの点において異なる。しかしながら、これは英語の与格交替に現れる子供の好みの原因を解明するのにおおいに役立つのである。

韓国語を母語として習得する子供たちがどちらか一方の構文を好むのかどうか調査するために30人の子供を対象とした文理解実験を行った。被験者は韓国のソウルとチョラブクトに住む子供たちで、その内訳は4歳児10人(平均年齢=4;4)、5歳児10人(平均年齢=5;7)、6歳児10人(平均年齢=6;5)であった。⁴

実験は子供にテスト文を聞かせ、その文の意味を人形や他の道具を使って動作で示させる動作法で行われた。テスト文は意味的に可逆的な10文を用いた。そのうちの5文は(15a)のような[主題－着点]の語順であり、残りの5文は(15b)に示すような[着点－主題]の語順であった。

³ ここで紹介する実験と同様の現象を日本語で取り扱ったものに Suzuki et al. (1999) がある。

(15)a. 主題－着点の語順

主題 着点

Kom-ul so-eykey milecwul-lay-yo?

bear-Ac cow-Dat push-Fut-SentEnder

‘Will you push the bear to the cow?’

b. 着点－主題の語順

着点 主題

So-eykey kom-ul milecwul-lay-yo?

cow-Dat bear-Ac push-Fut-SentEnder

‘Will you push the bear to the cow?’

結果は表 2 に示す通りである。表からわかるように被験者は最初の名詞句を主題，2 番目の名詞句を着点と解釈する傾向を強く示した。また，ここで見うけられた誤りはすべて[与格－対格]を[対格－与格]として解釈するもの，またはその逆であった。

表 2 理解力テストの結果(正解率)

年齢別グループ	主題－着点の語順	着点－主題の語順
4 歳	88%	20%
5 歳	90%	66%
6 歳	94%	70%
全体	91%	52%

反復測定による 3 元配置の分散分析 (a repeated measures 3-way ANOVA) によると，年齢に関する有意差が見受けられた ($F(2,27) = 11.22$, $p < 0.001$). しかしながら，この研究の意義からすると更に重要な発見は，子供たちは[主題－着点]の語順の方が[着点－主題]の語順よりも多く正解できたということである ($F(1,27) = 53.09$, $p < 0.001$). また，語順と年齢の因子の間にも交互作用の効果が見られた ($F(1,27) = 4.40$, $p < 0.05$).⁵ これは年齢が高くなればなるほど，[着点－主題]の語順に関しての正解率が高くなることを示している。

さて，この結果は英語の習得に関して何を意味するのであろうか。英語を獲得する子供はなぜ与格構文（[主題－着点]の語順）を二重目的語構文（[着点－主題]の語順）よりも好むのであろうか。ここで韓国語のデータを使うことによって前に示した 4 つの仮説のうちの 3 つを排除することができるのである。

まず入力仮説であるが，韓国語において母親の子供への語りかけがなぜ子供の[主題－

⁴ 予備実験の結果，4 歳未満の子供はこの実験に不適切であることがわかった。

⁵ 有生性に関する差（有生－有生と無生－無生）に有意差は認められなかった ($p > 0.05$).

着点] の語順の好みに結びつくのか、それを説明できるようなものは何もないようである。実際に、3 組の韓国人親子の 18 時間における会話（6 ヶ月の観察期間で子供の年齢は 3;2 から 3;10 まで）を調べたところ、親が子供へ語りかけた文の中には主題と着点の両方を含む文はかなり少ないということがわかった。これは、韓国語では項の省略が可能なので、三項動詞の名詞句のうち少なくともひとつは通常表面にあらわれないからである。しかしここで重要なのは、私たちが観察した 240 例のうち 70% が [与格－対格]（[着点－主題]）の語順であったことである。すなわち、大人からの入力で頻度の高い語順とは、子供たちに好まれていない方の語順だったのである。これは、子供の語順に関する好みは、言語習得の初期では頻度が決定的な要因とはなり得ないことを示している。

次に、明示性の仮説と有標性の仮説についてであるが、これらも韓国語の実験によって得られた結果を説明することはできない。韓国語においては [主題－着点] も [着点－主題] も同じように格助詞によって示されるので意味役割の明示性という点においては、どちらのパターンでも差がない。また、有標性に関しては他動性や結合価 (**valence**) において二つの構文は同等であると考えられる。これは、どちらの構文でも使用される動詞は直接目的語と間接目的語をそれぞれひとつずつ要求する三項動詞だからである。

ここで最後に残されたのが一致の仮説である。韓国人の子供は、出来事が起こる順番が文中に現れる意味役割の順番に反映された写像性の為に [主題－着点] という語順を好むというこの仮説が、実験の結果から支持され得ると思われる。すべての子供は全く同じ言語能力 (**language faculty**) と獲得装置 (**acquisition device**) を心のなかに備えていると考えられるので、もし写像性が韓国語で [主題－着点] の語順を好む強い要因となっているならば、英語の [主題－着点] の好みにおいても写像性が非常に強い役割を果たしていることは間違いないと結論付けることが可能である。英語においては、この研究で仮説として挙げてきた他の要因が付随的に関係している可能性を完全に退けることはできないが、それらの要因のいずれかひとつによってのみ [主題－着点] の好みを引き起こされていた可能性は排除できる。なぜならば、もしこのようなことが起こっていたならば、韓国人の子供たちは [主題－着点] の語順に対する好みを示すことはなかったはずだからである。これまで述べてきたように、もし入力強い要因になっているのならば、[着点－主題] の方をより好んだであろうし、明示性や有標性によるものならば、何の好みも表れなかったはずである。これらに反して、強い [主題－着点] の好みを観察されたということは、まさに写像性と一致の仮説が予測する結果であったと言える。

このように研究を進めてくると、韓国語のデータを使って英語の習得研究を探るという大変興味深い方法が採られていたことがわかつて思う。そして、これが可能なのは「言語学的アプローチ」に基づいた方法が採られていたからに他ならないのである。文法に関しては、「意味役割」「有標性」「写像性」などに基づいた分析を行い、心理言語学的には実験を通して「仮説の検証」を行うという方法を採用した。そして最も重要なのは、交差言語的な見地から問題に取り組み、英語の習得研究を行う上で韓国語のデータを利用したことである。次節では、第二言語習得をこれと同じように言語学的なアプローチから扱った

例を紹介する。

3. 第二言語としての英語における関係詞の習得

第二言語習得の統語に関する分野で、英語の関係詞の習得はその産出や理解において(16)に示すような主語の関係詞化の方が(17)に示すような直接目的語の関係詞化よりも容易という結果が報告されている (Gass, 1979, 1980, 1982; Wolfe-Quintero, 1992; Eckman et al., 1988; Doughty, 1991; 要約に関しては O'Grady, 1999 を参照)。また、同じような結果は *wh*-疑問文においても第一言語習得、第二言語習得の両方で報告されている。(たとえば Kim, 1995; Yoshinaga, 1996 など)

(16) 主語の関係詞化

the truck that [__ pushed the car]

(17) 直接目的語の関係詞化

the truck that [the car pushed __]

なぜこのような結果が得られるのかに関して、第二言語習得研究の分野では二つの提案がされている。ひとつは、言語の階層構造において空所 (gap) と主要部 (head) の距離を捉え、これによって主語と直接目的語の関係詞化に関する難易度の差を説明しようとするものである。(例えば O'Grady, 1999; O'Grady, 1987 の分析に基づいた Wolfe-Quintero, 1992 も参照。) この提案は二つの仮定の上に成り立っている。それは関係詞節中の空所はそれが修飾する名詞と連結 (linked) しているということ、そしてこの連結を可能にする操作の際に通過する統語節点 (syntactic node) の数が文の構造における計算機能の複雑さを決定する要因になるということである (O'Grady, 1997, p.179; Collins, 1994).⁶ この仮説を構造的距離の仮説と呼ぶことにする。

(18) 構造的距離の仮説 (The Structural Distance Hypothesis)

統語操作において統語節点の通過数として計算される構造的な距離がその構造の相対的な複雑さを決定する。

以下に示す例において明らかなように、空所と主要部の間の構造的な距離は、直接目的語の関係詞化の方が主語のそれよりも大きい。⁷

⁶ この連結を可能にするのは顕在的 (overt) または抽象的 (abstract) な移動 (movement) (Chomsky, 1977), またはNP素性の継承 (inheritance of an NP feature) による (e.g., Gazdar, et al., 1985; O'Grady, 1997) と考えられる。

⁷ O'Grady (1997) にしたがって、ここでは CP, IP, AgrP などの機能範疇を含まない表示を仮定している。しかしながら、Collins (1994) のように機能範疇などを仮定したとしても同じような結果

(19) a 主語の関係詞節化:

the truck that [_S ___ pushed the car]
└──────────┘

空所と主要部の間の最大投射句の数 = 1 (S)

b. 直接目的語の関係詞節化:

the truck that [_S the car [_{VP} pushed ___]]
└──────────────────────────┘

空所と主要部の間の最大投射句の数 = 2 (VP と S)

その一方でこれとは全く異なる提案が Tarallo and Myhill (1983), Hawkins (1989), Lee (1998/99) などによってなされている。これは空所と主要部の間に存在する語の数によって決定される線的な距離 (linear distance) が異なるタイプの関係詞化の難易度を予測するというものである。ここでは、これを線的距離の仮説と呼ぶことにする。

(20) 線的距離の仮説 (The Linear Distance Hypothesis)

空所と主要部の間に存在する語の数によって決定される線的な距離がその構造の相対的な複雑さを決定する。

以下の (21) によって示されるように、空所とその主要部との距離は、主語の関係詞化の方が直接目的語の関係詞化よりも構造的に近いだけでなく線的にも近いことがわかる。(語の上につけられた番号は主要部と空所の間の単語数を示す。)

(21)a. 主語の関係詞節化

1
the truck that [___ pushed the car]
└──────────┘

空所と主要部の線的距離 = 1 語

b. 直接目的語の関係詞節化:

1 2 3 4
the truck that [the car pushed ___]
└──────────────────┘

空所と主要部の線的距離 = 4 語

ここでもまた、同じ現象に対して全く異なる二つの説明が存在することになるが、更にや

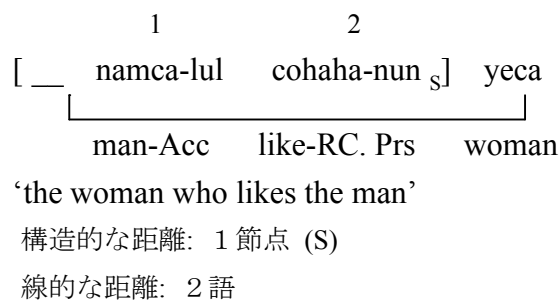
が得られる。

つかいなことは、構造的距離の仮説も線的距離の仮説も、英語では主語の関係詞節化の方が易しいという結果を予測することである。もちろんその理由は根本的に異なっており、前者では階層的な統語構造 (hierarchical syntactic representations) における計算 (computational operations) が関わっていると仮定しているのに対して、後者では単なる語の順番のみが決定要因であるとしているのであるが、それでもこの2つの仮説は英語においては、どちらの主張が正しいかを決定することはできない。

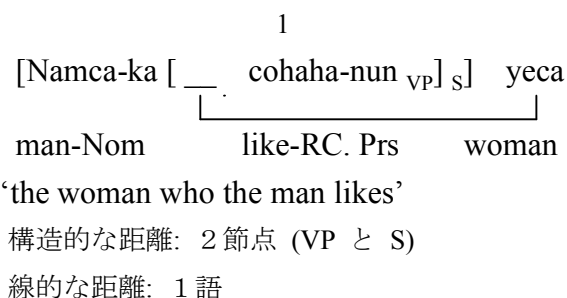
しかし、ここでも言語学的なアプローチを第二言語習得研究に用いることにより、他言語の習得データから英語習得を見ることが可能なのである。再び韓国語を取りあげる。

以下の二つの例が示すように、韓国語では関係詞節はそれが修飾する名詞よりも前にくる。これが線的な距離と構造的な距離を切り離して捉えることを可能にする。つまり、主語の空所は直接目的語の空所より、その主要部に構造的には近いが、線的には遠いということになる。(韓国語での動詞の接尾辞は時制と節のタイプを同時に表す。RC＝関係詞節)

(22)a. 主語の関係詞節化



b. 直接目的語の関係詞節化

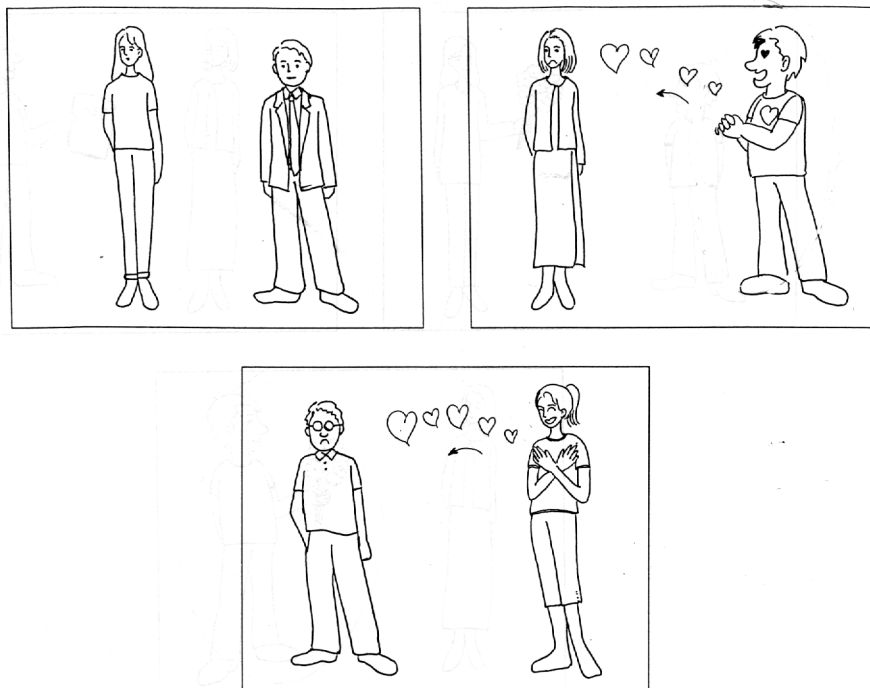


この言語事実を基に第二言語としての韓国語習得を調べることで、英語の関係詞節の習得に影響を与えている要因について知ることが可能となるかもしれない。O'Grady, Lee, and Choo (2002) で私達は絵画選択法を用いた理解力実験を行い、第二言語としての韓国語習得の主語関係詞化と目的語関係詞化の難易度を調査した。被験者は、まず以下の指示で始まる冊子を与えられた。

Each page of this booklet contains a series of three pictures. As you go to each page, you will hear a tape-recorded voice describing a person or animal in one of the three pictures. Your job is simply to put a circle around the person or animal described in the sentence. (Do NOT put the circle around the entire box.)

(日本語訳) この冊子には 1 ページに 3 枚の絵が描かれています。ページをめくるごとに、3つの絵の中の 1 枚に描かれた人物や動物に関する録音テープがながれます。そこで、テープが説明している人物か動物に丸をつけてください。(絵全体を選んで丸をつけないようにして下さい。)

図 1 実験で使用された絵の例



被験者が刺激文を正しく理解していれば、(23a)のような主語の関係詞節に対しては 3 番目の絵の右の人物を選ぶであろうし、(23b)のような直接目的語の関係詞節に対しては 2 番目の絵の左の人物を選ぶという予測がたてられる。

(23) a. 主語の関係詞節化

[___ namca-lul cohaha-nun] yeca
man-Acc like-RC. Prs woman
‘the woman who likes the man’

b. 直接目的語の関係詞節化

[namca-ka ___ cohaha-nun] yeca
man-Nom like-RC. Prs woman
‘the woman who the man likes’

テストに使われたのは主語の関係詞節と直接目的語の関係詞節それぞれ5つと、ここでは取り扱われていない他のパターンの関係詞節9つであった。

この実験の被験者は韓国語を第二言語として学ぶ英語母語話者 53 人である。その内訳はテキサス大学オースティン校で学ぶ 25 人の 2 セメスター生、20 人の 4 セメスター生、それにハワイ大学マノア校で学ぶ 8 人の 4 セメスター生であった。⁸ 実験はグループごとに行われ、すべてのグループに対して同じ冊子と同じ録音テープが使用された。

まずグループ間における有意差が認められなかったので ($F(2,51) = 2.00, p > 0.05$)、これ以後の分析と議論のために3つのグループをひとつにまとめた。その結果は表3に示す通りである。

表3 韓国語第二言語学習者の文理解 (N = 53)

	正解	逆の解釈(不正解)	その他の解釈(不正解)
主語の関係詞節化	194 (73.2%)	26 (9.8%)	45 (17%)
直接目的語の関係詞節化	60 (22.7%)	115 (43.4%)	90 (34%)

被験者の成績は、主語の関係詞節化の正解率が 73.2%、直接目的語の関係詞節化が 22.7%で、前者の方が後者よりもはるかに良いというもので、ここに有意差が認められた ($F(1,52) = 30.59, p < 0.001$)。不正解の中でも逆に解釈してしまう間違い（一方の関係詞節化がもう一方の関係詞節化として誤って解釈された数）も直接目的語の関係詞節化が 115 回に対して主語の関係詞節化が 26 回と明らかに主語の関係詞節化の方が容易であるという結果が得られた。（ここでは、その他の誤りのパターンについては議論しないことにする。）

被験者の個人成績について分析したところ、主語の関係詞節化に対しての強い好みがあることがわかった。被験者 53 人中 34 人の学習者がテストされた5つの主語関係詞節のうち少なくとも4つ以上を正解できたのに対し、直接目的語の関係詞節で4つ以上の正解を

⁸ 韓国語の授業での学習期間をセメスターで表す。1セメスターは約4ヶ月間で1年間が2セメスターから成るので、2セメスター生は1年目後半、4セメスター生は2年目の後半ということになる。

したのはわずか9人にすぎなかったのである。

主語の関係詞節化の方が容易いという結果を入力や教育の影響とすることは考えにくい。なぜならば、2 セメスター目の学生 25 人はこの実験に参加したわずか一週間前に初めて関係詞節を学習しており、いずれかのパターンに好みが偏るような時間的余裕はなかったからである。さらに、担当教員は教材や授業における教員自身の関係詞の使用に関しても、学生に主語の関係詞節化を好ませるような要因はなかったと報告している。

まとめると、この理解力テストにおいては、被験者の正解と不正解の両方のパターンから、第二言語としての韓国語学習では、主語の関係詞節の方が直接目的語の関係詞節よりもはるかに容易いという結論が得られた。韓国語において主語の関係詞節化は、目的語の関係詞節化より空所とその主要部間の線的な距離は遠いが構造的な距離は近い。よって、入力や教育による影響がまずありえない事を考慮すると、この実験結果は関係詞節の困難さを決定する主な要素は、線的な距離ではなく構造的な距離であると自信をもって結論付けることができる。

ここでもまた、言語習得研究に対して言語学的アプローチがいかに有効なものであるかを見ることができる。皮肉にも、英語の関係詞節の習得は英語の研究によってのみ解明することはできなかったのである。

4. 結論

はじめにも述べたように、言語習得研究に対しての言語学的アプローチとは2つの基本線の上に成り立っている。すなわち、(1)言語習得研究は文法分析と心理学的実験の両方を研究手段として使用することが可能であるし、またそうすべきであるということ。そして、(2)ある言語がどのように習得されるのかを調べるためには、何のつながりもないと思われるような他の言語の研究が必要になる可能性もあるということである。

このような観点から、言語学的アプローチがいかに言語習得研究に対して深い洞察力を与えるのかということを2つの研究例を通して見てきた。ここで得られた結果は、子供の言語獲得や大人の第二言語習得のメカニズムを理解するという意味で大変興味深いものである。そしてそれはまた、語学教育者にとっても直接に関与することなのである。もし二重目的語構文が写像性の影響で難しいとか、もし直接目的語の関係詞節化が言語処理の要因で難しいならば、教師はこの事実を理解する必要があるし、授業計画や練習問題にこれを反映させて対処すべきである。このように、様々なアプローチの中でも言語学的アプローチは言語習得や語学教育における幅広い問題や謎に対して有益な示唆を与えてくれるに違いない。

謝辞

ここで報告した2つの実験の共同研究者、Miseon Lee, Moho Choo, Minsun Song, および Sookeun Cho に感謝したい。

文献

- Cho, S., W. O'Grady, M. Lee, M. Song & T. Suzuki. (1998). Word order preferences for direct and indirect objects in children learning Korean. B. Park & J. Yoon (Eds.), *Selected Papers from the Eleventh International Conference on Korean Linguistics*, 735-43. Seoul: International Circle of Korean Linguistics.
- Cho, S., O'Grady, W., Lee, M., Song, M., Suzuki, T & N. Yoshinaga. (to appear). Word order preferences for direct and indirect objects in children learning Korean. *Journal of Child Language*.
- Chomsky, N. (1977). On *wh* movement. P. Culicover, T. Wasow & A. Akmajian (Eds.), *Formal syntax*, 71-132. San Diego: Academic Press.
- Collins, C. (1994). Economy of derivation and the Generalized Proper Binding Condition. *Linguistic Inquiry*, 25, 45-61.
- Cook, V.J. (1976). A note on indirect objects. *Journal of Child Language* 3, 435-38.
- Croft, W. (1991). Syntactic categories and grammatical relations. Chicago: University of Chicago Press.
- Dik, S. (1989). *The theory of functional grammar. Part I: The structure of the clause*. Dordrecht: Foris.
- Doughty, C. (1991). Second language instruction does make a difference. *Studies in Second Language Acquisition*, 13, 431-69.
- Eckman, F., Bell, L., & Nelson, D. (1988). On the generalization of relative clause instruction in the acquisition of English as a second language. *Applied Linguistics*, 9, 1-13.
- Gass, S. (1979). Language transfer and universal grammatical relations. *Language Learning*, 29, 327-44.
- Gass, S. (1980). An investigation of syntactic transfer in adult second language learners. R. Scarcella & S. Krashen (Eds.), *Research in second language acquisition*, 132-41. Rowley, MA: Newbury House.
- Gass, S. (1982). From theory to practice. M. Hines & W. Rutherford (Eds.), *On TESOL '81*, 129-39. Washington, DC: TESOL.
- Gazdar, G., E. Klein, G. Pullum & I. Sag. (1985). *Generalized phrase structure grammar*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Gropen, J., Pinker, S., Hollander, M., Goldberg, R & R. Wilson. (1989). The learnability and acquisition of the dative alternation in English. *Language* 65, 203-55.
- Hawkins, R. (1989). Do second language learners acquire restrictive relative clauses on the basis of relational or configurational information? The acquisition of French subject, direct object and genitive restrictive clauses by second language learners.

Second Language Research, 5, 156-88.

- Kim, S. (1995). The acquisition of *wh* questions in English and Korean. Doctoral dissertation. University of Hawaii.
- Langacker, R. (1995). Raising and transparency. *Language* 71, 1-62.
- Lee, M. (1998/99). The comparative difficulty of subject and dative relative clauses in Korean. *Hawaii Working Papers in Linguistics*, 51-65
- O'Grady, W. (1987). *Principles of grammar and learning*. Chicago: University of Chicago Press.
- O'Grady, W. (1997). *Syntactic development*. Chicago: University of Chicago Press.
- O'Grady, W. (1999). Toward a new nativism. *Studies in Second Language Acquisition* 21, 621-33.
- O'Grady, W., Miseon, L. & M. Choo. (2002). The acquisition of relative clauses in Korean as a second language. ms. University of Hawaii at Manoa.
- Osgood, C. & A. Zehler. (1981). Acquisition of bi-transitive sentences: pre-linguistic determinants of language acquisition. *Journal of Child Language* 8, 367-84.
- Pinker, S. (1989). *Learnability and cognition*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Ritter, E. & S. Rosen. (1998). Delimiting events in syntax. W. Geuder & M. Butt (Eds.), *The projection of arguments: Lexical and syntactic constraints*, 135-164. Stanford: CSLI.
- Roeper, T., Lapointe, S., Bing, J. & S. Tavakolian. (1981). A lexical approach to language acquisition. S. Tavakolian (Ed.), *Language acquisition and linguistic theory*, 35-58. Cambridge, MA: MIT Press.
- Slobin, D. (1985). Crosslinguistic evidence for the language-making capacity. D. Slobin (Ed.), *The cross-linguistic study of language acquisition. Vol. 2: Theoretical issues*, 1156-1256. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Snyder, W. & K. Stromswold. (1997). The structure and acquisition of English dative constructions. *Linguistic Inquiry* 8, 281-317.
- Suzuki, T., Cho, S., Lee, M., O'Grady, W., Song, M. & N. Yoshinaga. (1999). Word order preferences for direct and indirect objects in children learning Japanese. *The 2nd International Conference on Cognitive Science and The 16th Annual Meeting of the Japanese Cognitive Science Society Joint Conference*, 108-112.
- Talmy, L. (1988). Force dynamics in language and cognition. *Cognitive Science* 12, 49-100.
- Tarallo, F., & Myhill, J. (1983). Interference and natural language processing in second language acquisition. *Language Learning*, 33, 55-76.
- Van Voorst, J. (1988). *Event structure*. Philadelphia: John Benjamins
- Waryas, C. & K. Stremel. (1974). On the preferred form of the double object

- construction. *Journal of Psycholinguistic Research* 3, 271-79.
- White, L. (1987). Markedness and second language acquisition: The question of transfer. *Studies in Second Language Acquisition* 9, 261-85.
- Wolfe-Quintero, K. (1992). Learnability and the acquisition of extraction in relative clauses and *wh* questions. *Studies in Second Language Acquisition*, 14, 39-70.
- Yoshinaga, N. (1996). *Wh-questions: A comparative study of their form and acquisition in English and Japanese*. Doctoral dissertation. University of Hawaii.

訳者まえがき

ここに紹介するのは William O'Grady 著 *A Linguistic Approach to the Study of Language Acquisition* の日本語訳である。この論文は 2000 年 7 月にハワイ大学で行われた Pan-Pacific Association of Applied Linguistics の年次大会において招聘講演として発表され、2001 年発行の同学会の学会誌 *The Pan-Pacific Association of Applied Linguistics* に掲載されたものである。実験を中心とした言語習得研究（第一言語習得・第二言語習得）が紹介されているが、この論文は一般の研究論文とは異なり、大学の学部生や大学院生、または語学教師などの読者を対象としており、必ずしも言語学の背景知識を前提として書かれたものではない。しかし、これは言語習得研究に言語学が必要でないということを意味するものでは決してない。逆に、この論文ではなぜ言語学的なアプローチが言語習得研究に必要とされているのかをわかりやすく解説している。言語習得研究をしたいが何からどのように始めたら良いのかわからない、また、生成文法など特定の言語学の理論に関する知識がないので言語習得研究ができないと考えているような初心者には特に読んでいただきたい。翻訳に際しては、読みやすさを第一に優先させた。このため O'Grady 氏の承諾のもと、説明を加えたり文章のスタイルを大幅に変更した箇所が多くある。また、専門用語に関しては初出の際にカッコ内に英語を併記した。この論文をきっかけに多くの読者が自分の手で言語習得研究に取り組み始めることを期待したい。最後に、この翻訳にあったて多くの有益なコメントをくださった Kevin Gregg 氏に感謝する。

鈴木孝明